

「心をはぐくむ」

—— 乳幼児期に大切にしたいこと ——



公益財団法人
ソニー教育財団

DTP:YAMAGATA INTECH株式会社 印刷・製本:YAMAGATA株式会社
2020年5月発行(11) ©2020 公益財団法人ソニー教育財団 無断転載を禁じます

公益財団法人 ソニー教育財団

「今も変わらぬ 井深 大 からのメッセージ」

人としてのあらゆる可能性をもって生まれる子どもたち。

豊かな愛情と好奇心が満たされる環境の中で育つことが、何よりの幸せです。ソニーのファウンダーである井深 大は、この可能性と幸せを追求し「21世紀を担う心身ともに健全な人づくり」を願って、子育てに関するさまざまな提案をしてきました。

その21世紀を迎えた今日でも、井深が残した多くの言葉は子育ての重要なメッセージになっています。そこで、改めて「心をはぐくむ」ための提言として、この冊子を作成いたしました。

この冊子は、「親子の絆」をベースに「心育て、人づくり」を目指して、井深が1969年に創立した財団法人 幼児開発協会の月刊『E D A』誌を基に、育児のヒントになるよう、一部編集してまとめたものです。

ページをめくる度に、深い愛情をもって、子どもの成長を楽しみにする親の姿をイメージできます。そして、身の回りのことに心を動かし、それにかかわる乳幼児期の感性和創造性の芽生えが育まれる姿が描かれています。

ソニー教育財団は、「科学する心を育てる」～豊かな感性和創造性の芽生えを育む～を主題にして、子どもたちの健やかな成長のために、保護者や保育者への支援活動をしています。

このメッセージが、未来を切り開く子どもたちの可能性や幸せに結び付くことを願っています。

公益財団法人 ソニー教育財団

「心をはぐくむ」

—— 乳幼児期に大切にしたいこと ——



CONTENTS

◆胎児、乳幼児期は“心の土台づくり”を大切に.....	2
◆子どもの成長に合わせた親のかかわり.....	3
マタニティー	
◆育児は生命が宿った時から.....	4
◆大切なお父さんのサポート.....	5
0歳児	
◆抱っこは親子の最高の対話.....	6
◆赤ちゃんは伝えたがっている.....	7
◆豊かな感性が「心」を育む.....	8
◆親は子どもの「お手本」.....	9
1歳児	
◆かばうことは、うばうこと.....	10
◆「イヤ、ダメー」も成長のしるし.....	11
◆子どもの興味・好奇心を育む.....	12
◆抱っこで愛情の補給.....	13
2歳児	
◆あせらず、くらべず、あきらめず.....	14
◆言葉のコミュニケーションに頼り過ぎないで.....	15
◆ひとり遊びから仲間へ.....	16
◆達成感が自信を育む.....	17
◆「科学する心」を見つけようフォトコンテスト.....	18
◆科学する心を育てる～豊かな感性和創造性の芽生えを育てる～.....	20
◆財団の理念／ソニーの幼児教育への取り組み.....	21

「心をはぐくむ」

胎児、乳幼児期は “心の土台づくり”を大切に

人としての基礎ができる時期はマタニティーから2歳児頃までの胎児、乳幼児期にあります。この時期には、何よりも人間として大切な“心の土台”を育てていただきたいと、「親と子どもの絆」をベースに「心をはぐくむ」ことを考えてきました。

お母さん、お父さんが、子どもは自ら育つ力をもっていることを心にとめ、我が子の成長に合わせてかかわっていくことで、子どもの心はのびのびと育っていきます。

子どもの成長に合わせた 親のかかわり

マタニティーから2歳児頃まで、それぞれの子どもの成長の時期に、特に親に求められるかかわりのキーワードは、マタニティーが「感じる（子どもの気持ち、存在を意識する）」、0歳児が「見つめる（目の前の姿や行動から、子どものサインや気持ちをくみ取る）」、1歳児が「見守る（子どもの存在、自我を受けとめる）」、2歳児が「認める（子どもを認め、理解する）」です。キーワードが時期によって変わるのは、依存から自立へといった子どもの成長の変化に合わせて、子どもとかかわる親の姿勢も、状況に応じた対応が求められるからです。

そして、この「感じる」「見つめる」「見守る」「認める」プロセスは、子どもが成長していても、親子のかかわりの基本となります。子どもは、親から愛され、認められて自分に自信をもつことで、周りとの信頼関係を築くことができる自立した人へと育っていくのです。

赤ちゃんがおなかにいると分かった時から、子育ては始まっています。乳幼児期の子どもの成長に合った、親のかかわりで大切なことをご紹介します。

育児は生命が宿った時から

—— 胎児期からの心育て ——

胎児がすばらしい能力をもっていることをお母さん、お父さんが知り、コミュニケーションをとることで、胎児の心は育まれていくと感じたことはありませんか。おなかの中から、ひとりの「心をもつ者」として感じながらコミュニケーションをとることで、赤ちゃんに“あたたかい心”が育まれていくと感じたことはありませんか。

まずお母さんがおなかの赤ちゃんを感じ、赤ちゃんの気持ちを考え、まだ姿が見えない我が子との生活を、自分なりにイメージすることを楽しんでみる——それが、おなかの赤ちゃんにとって、「人」と「人」の絆づくり、すなわち人間関係の第一歩になります。

お母さん、お父さんが、おなかの赤ちゃんのことを大切に思い、生まれてくる日を待ち望むことで、おなかの赤ちゃんは「自分は待ち望まれて生まれるんだ」という喜びを感じ、安心感が育まれます。



大切なお父さんのサポート

—— 周囲の協力も赤ちゃんにとっての環境 ——

お母さんが落ち着いた時間を過ごしていると、赤ちゃんも同じようなゆったりした気持ちになります。またイライラしたり、不安だったりすると、その気持ちが赤ちゃんに伝わってしまうかもしれません。このように、おなかの赤ちゃんはとても敏感で、お母さんの気持ちやおなかの外の様子をまるごと感じとっています。

お母さんが安心してマタニティー期を過ごすためには、何よりもお父さんのサポートが必要です。お父さんがお母さんにやさしい気持ちで接したり、いたわりの言葉をかけたりすることで、つわりや出産への不安、またホルモンバランスの変化のために神経がピリピリしがちなお母さんの気持ちが和らぎます。お父さんの理解と協力、そして夫婦でおなかの赤ちゃんのこと、生まれた後の子育てのことをたくさん話し合うことで、お母さんに安心感を生み出します。

マタニティー期から、お父さんをはじめとした周りの人たちとよいコミュニケーションをとることは、お母さんにとってもおなかの赤ちゃんにとってもよい環境になります。

抱っこは親子の最高の対話

—— スキンシップが子どもの心を育てる ——

0歳児にとっては、何もかもが初めての体験なので、この時期にお母さん、お父さんが抱っこして安心させてあげることは、健やかな成長の力になります。たくさん抱っこされながらおっぱいを飲ませてもらったり、お母さん、お父さんから語りかけられたり、微笑みかけられることで、赤ちゃんは愛されることの喜びを感じ、人との信頼関係を築いていきます。

なぜ赤ちゃんが泣いているのか分からない時、まず抱っこをしてみませんか。すると、「おなかがすいている」「遊んでほしい」といった赤ちゃんの気持ちが伝わってきます。このように、抱っこすることによって赤ちゃんの気持ちに耳を傾け、赤ちゃんの立場になって受けとめてあげることができるのです。

ただ、抱っこする人が悲しかったり、イライラしたりしている時は、抱くことによって赤ちゃんの心が不安定になってしまいます。そんな時は、赤ちゃんの顔をやさしく見つめ、落ち着いてから抱っこしてあげると、お互いの安心につながります。

抱っこは、赤ちゃんが気持ちを訴え、それをお母さん、お父さんが受け入れ、お互いの気持ちが伝わり安心する、とても大切なコミュニケーションのひとつです。



赤ちゃんは伝えたがっている

—— 言葉以前のコミュニケーション ——

赤ちゃんは、泣いたり笑ったり、喃語を発したり、手足を動かしたり、実にさまざまな方法で自分の気持ちを表しています。大人に個性があるように、赤ちゃんのサインにもそれぞれ違いがありますが、それはその時々によって違ってきますし、いつも同じとは限りません。

ですから、赤ちゃんの泣き声や様子からサインを受けとり、赤ちゃんが今、何を伝えたがっているのか読みとることが大切です。「この子のサインはこれ」と思い込まずに、日々の成長とともにサインの変化も見逃さないことで、赤ちゃんはのびのびと育ち、お母さん、お父さんが幸せを実感することにつながります。

それには、愛情をもって赤ちゃんに語りかけ、積極的に赤ちゃんとはスキンシップをもつように心がけることが大切です。ゆったりと抱っこしたり、目と目を合わせ顔を眺めたりするなど、コミュニケーションのとり方を工夫しましょう。

お母さん、お父さんが語りかけながら、スキンシップによる働きかけを積み重ねていくことで、赤ちゃんも頻繁にサインを送るようになりますし、赤ちゃんのちょっとした表情の変化からサインを感じとれるようになっていきます。

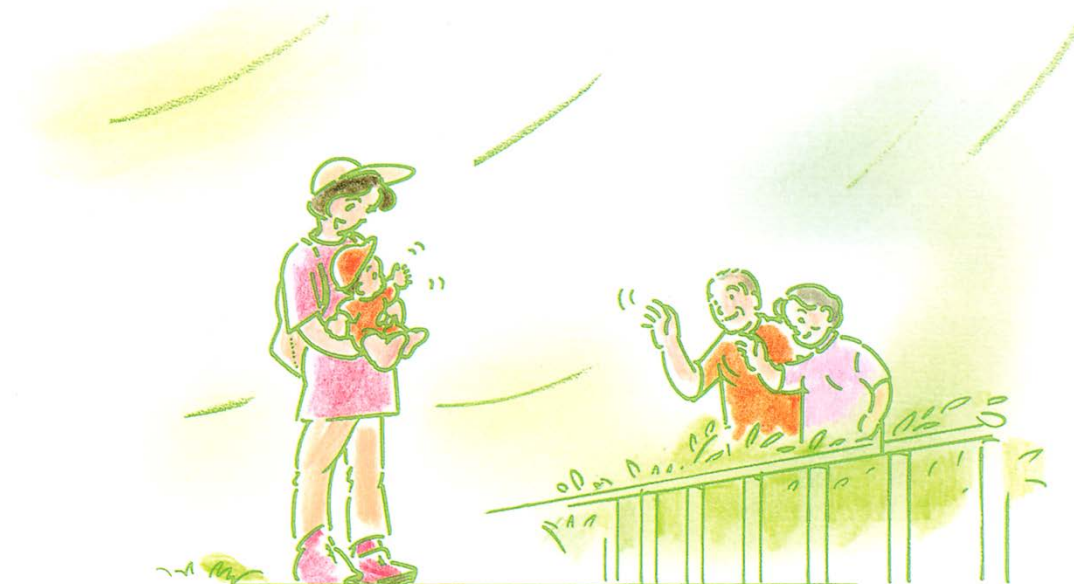
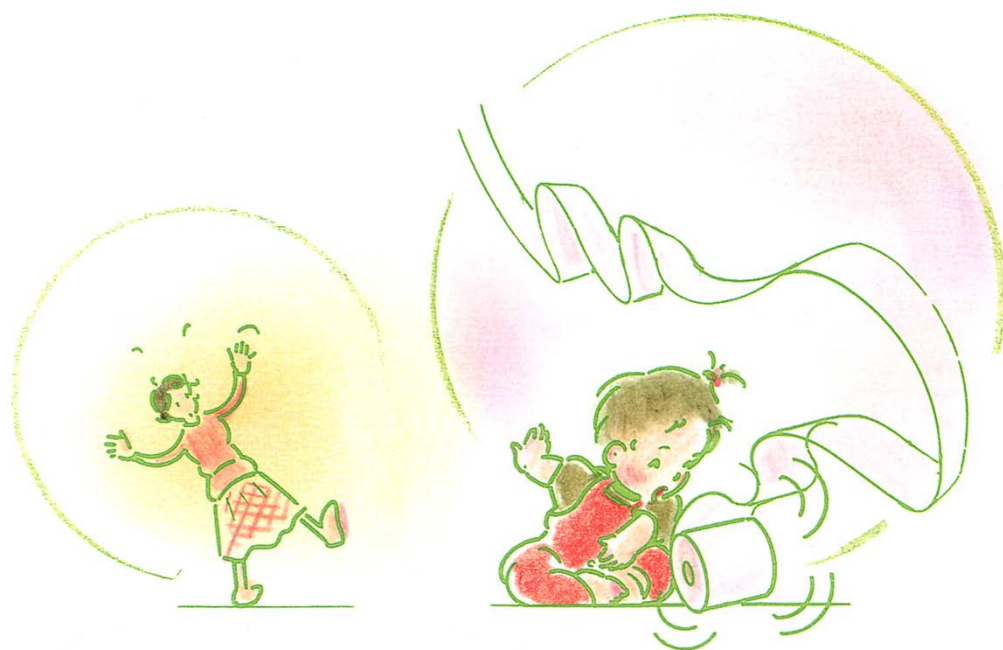
豊かな感性が「心」を育む

赤ちゃんは、身の周りにあるいろいろなものに興味を示し、何でも手で触ったり、口に入れたりします。そばで見ているお母さん、お父さんは、ついそれを取りあげてしまいがちですが、危険でない限り、様子を見ながら赤ちゃんが自由に過ごせることが大切です。

赤ちゃんは物に触ったり、なめたりすることで、冷たい、熱い、フワフワ、ゴツゴツといった感覚を感じとっています。こういった感触の他に、見る、聞く、味わう、匂いをかぐといった感覚・感性をフルに活動させています。

特に、土の感触、草花の香り、鳥の鳴き声など、自然から感じられることは数限りなくあります。お母さん、お父さんも赤ちゃんと一緒に自然にたくさん触れ、「風が気持ちいいね」「鳥の声が聞こえるね」など、語りかけてあげると、赤ちゃんは感覚・感性で体験したことを吸収していきます。

こうした乳幼児期のたくさんの体験が、豊かな感性や心を育む基礎になります。



親は子どもの「お手本」

乳幼児期の子どもは見たもの、聞いたもの、感じたものをそっくりそのまま吸収する能力を発揮します。ですから、子どもに身に付けて欲しい生活習慣や態度は、お母さん、お父さんが毎日の生活の中で繰り返し心を込めて示していくことによって、自然によい習慣となっていきます。

特に、「相手の立場を理解し、お互いを思いやる」「命を大切にする」「人に迷惑をかけない」といった将来育って欲しい「あたたかい心」は、この時期の愛情のある環境の中でしか身に付けることはできないと言われています。お母さん、お父さんの思いやりのある行動や会話を見たり、聞いたりしながら、子どもに自然に優しさが育まれていくのです。

0歳児の場合は、吸収したことをまだ上手に表現できませんが、子どもたちは楽しみながらいろいろなことを吸収していきます。成長と共に自然に表現し始める日を待つことは、子育ての大きな喜びのひとつです。

かばうことは、うばうこと —— 子どもの「やりたい！」を大切に ——

何でも自分でやってみたい1歳児期。まだひとりで上手にはできませんから、親は我が子にできるだけ大変な思いをさせたくない、つい手を貸してしまったり、時間がかかるからと代わりにやってしまったりすることがあります。

しかし、自分の力で物事を成し遂げていくためには、誰でも壁にぶつかなければなりません。また、人間は生まれながらに自立する能力が備わっているものです。たとえ上手にはできなくても、いろいろやってみる体験も大切な子どもの成長過程のひとつです。

また子どもは、大人の気がつかないことに興味をもって楽しんでいることがあります。例えばブロック遊びをしながら、せっかく組み立てたブロックをただ壊しているように見える時がありますが、ブロックが崩れる音や、落ちた時のブロックの位置、またその時の周囲の反応などを楽しんでいるのかもしれません。子どもが集中して何かをしている時は、自分なりにいろいろ考えながらやっているのです、静かに見守ることが大切です。

お母さん、お父さんは子どもの力を信じて、気持ちを認めながら、自立する力を伸ばしてあげることを第一に考えたいものです。

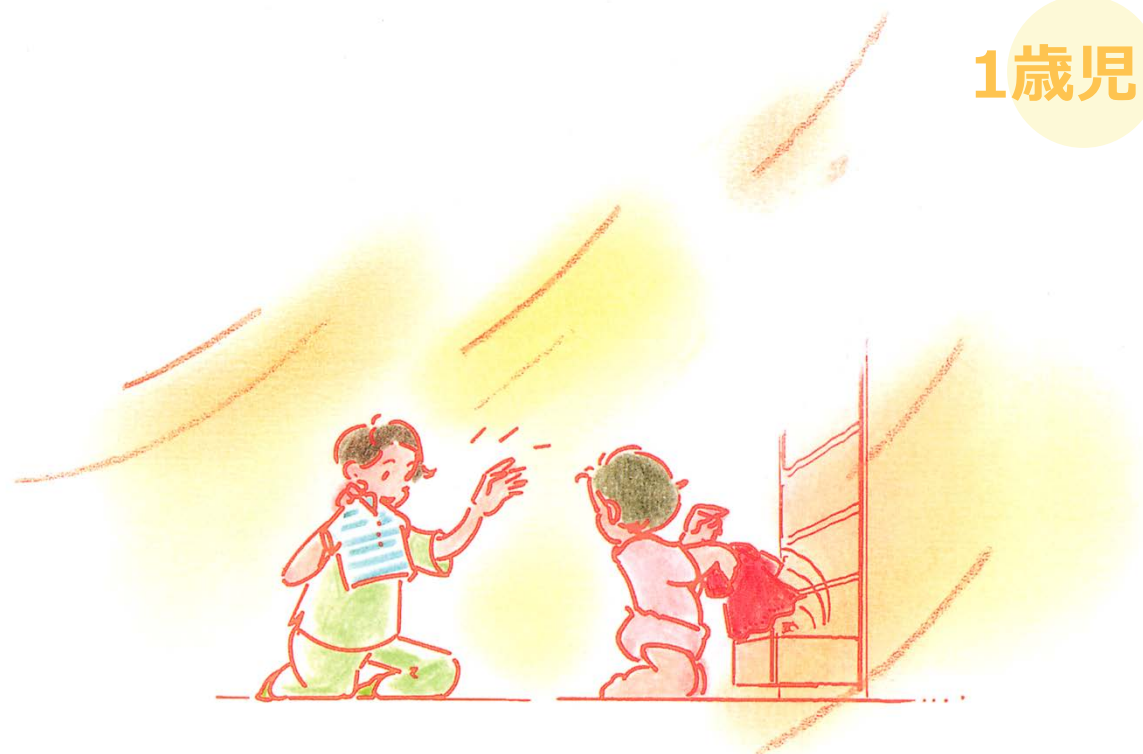


「イヤ、ダメー」も成長のしるし —— 「自分でできた！」と思えるような手助けを ——

1歳半くらいになると自我が芽生えてきて、「自分で、自分で！」と言い始めます。自己主張するようになるのは、大きな成長の証なのですが、「イヤ、ダメー」と、親の言うことを聞かなくなった子どもの気持ちが分からなくなってしまうこともあります。

「今日はこれを着ましょう」と服を出してあげると「イヤ」、「じゃあ、しまおうかな」と言うと「ダメー」などと、なんでも拒否の言葉が多くなる時期があります。大好きなお母さん、お父さんの提案を拒否することで、自分（我）を主張するようになってきたのです。こんな時、子どもが何をどうしたいのかしばらく様子を見守ることはできますか。自分のことを必ず見ていてくれる、わかってくれる相手だからこそ、自分の気持ちをぶつけることができるのです。

「自分で！」と言い出したこの時期に、子どもの行動を見守り、「自分でできた！」と思えるような手助けをしてあげられるようになることが、お母さん、お父さんの目標と言えるかもしれません。



子どもの興味・好奇心を育む

この時期は、子どもが興味・好奇心の対象に自らかかわっていく時期です。子どものやることすべてを「できる・できない」「わかる・わからない」と評価したり、ほめたり叱ったりする必要はありません。何よりも大切なことは、やった結果ではなく、子どもが楽しんでいることをお母さん、お父さんが認め喜ぶことです。

例えば、子どもが絵を描き出した時に、お母さん、お父さんが傍らで一緒に同じ遊びをして楽しむことは、子どもの興味を広げたり、好奇心を育んだりする大切なかわりとなります。

また、子どもが嫌がっているのに何かを押しつけたり、楽しそうに遊んでいる子どもに「それはこうして遊ぶのよ」と教えたりすることは、創造力や遊びに対する興味を取り上げてしまいます。

親が子どもにしてあげられることは、機会や場所を提供することです。それは、「子どもを何に育てるか」ではなく、子どもが自分の興味の対象を自ら発見できるための選択の可能性を、なるべく豊富に与えてあげることではないでしょうか。



抱っこで愛情の補給

—— 子どもの気持ちを受けとめて ——

子どもの自我が芽生えてくると、興味の幅も広がっていき、少しずつ自分の力で外の世界へ歩き出そうとする時期に入ります。今までお母さん、お父さんにべったりだった我が子が、自分から離れて楽しく遊んでいる姿に、少し淋しさを感じるかもしれません。

子どもは自分でやりたい気持ちはありますが、いきなりひとりではできませんし、不安もたくさん感じています。そんな時、抱っこして欲しいと子どものほうからお母さん、お父さんのところに来ることもあります。お母さん、お父さんの変わらない愛情を確認し、また安心して冒険を続けていくことができるのです。

あまり赤ちゃん扱いをして、何でもお母さん、お父さんがやってあげると意欲の部分が育ちませんし、反対に「早く自立してほしい」と突き放してしまうと、子どもは不安でいっぱいになり、かえって自立できません。振り返った時にお母さん、お父さんがいてくれる——子どもは戻れるところがあると、安心して新しいことにチャレンジしていけます。

お母さん、お父さんに助けを求めてきたら、抱っこで「愛情」をたっぷり補給することで、子どもの安心感につながります。1歳児は、愛情確認のための抱っこが必要な時期です。

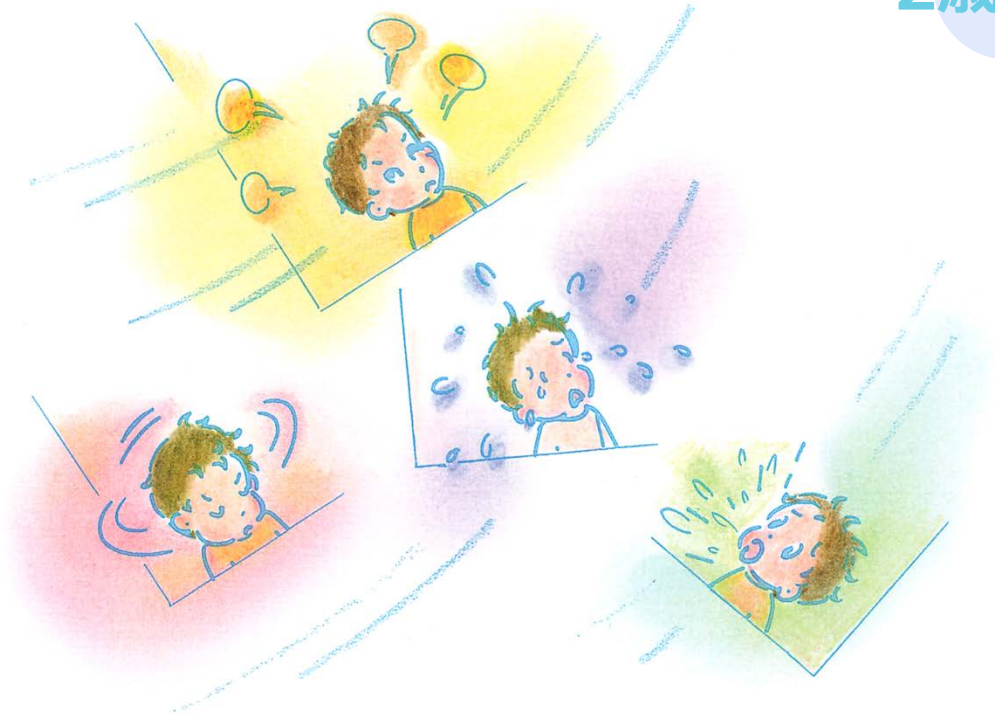
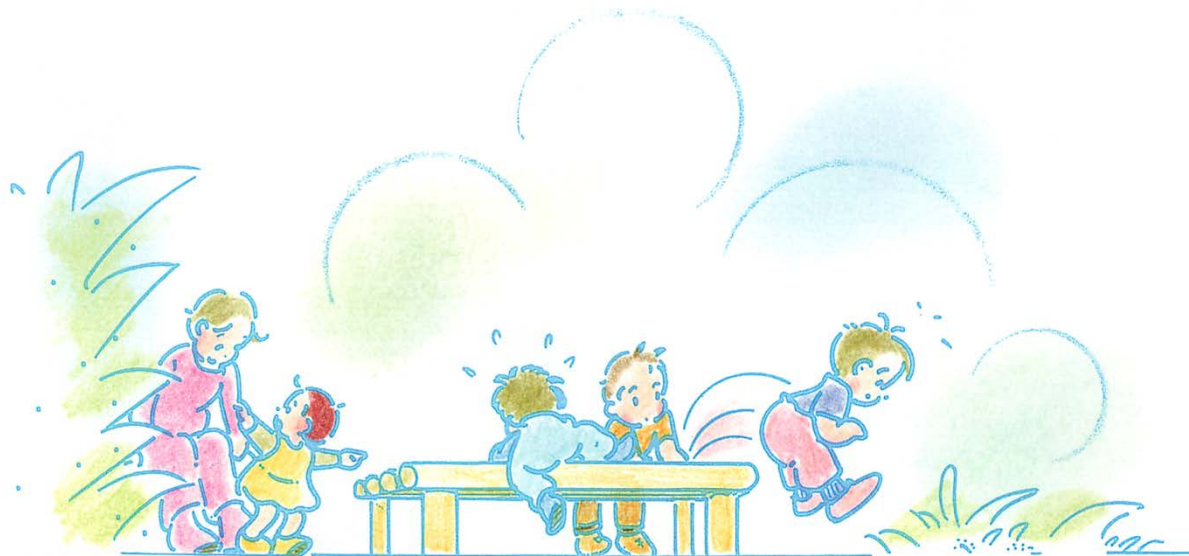
あせらず、くらべず、あきらめず —— 子どもの力を信じて ——

2歳を過ぎると、周囲と協調していくためにも、世の中には守らなくては行けないルールがあることを、分かるように伝えることも必要になります。しかし、この時期の子どもは、お母さん、お父さんの思い通りにはならないことが増えてきます。

こんな時、「どうして言うことを聞いてくれないのか」「他のお子さんはできるのに」と、“理想的な子ども像”ができあがってしまうと、つい焦りを感じて、自分の子どもの現在の姿を見過ごしてしまいがちになります。

親が子どもの気持ちを大事にして、「子どもにどんなふうに伝えればわかってもらえるのだろう」と考えながら働きかけてみてください。お母さん、お父さんの我が子を信頼している気持ちが子どもに実感として伝わっていけば、子どもにとって自立する力になります。

子どもの成長を楽しみにしながら「あせらず、くらべず、あきらめず」、ありのままの子どもを受け入れることで、親への信頼感が育まれます。



言葉のコミュニケーションに頼り過ぎないで —— 言葉の後ろにある気持ちと向き合う ——

子どもがだんだんおしゃべりできるようになってくると、親のほうも「話せばわかる」という思いから、言葉かけがつい多くなりがちです。しかし、子どもはまだ自分の思いを上手に言葉で表現することはできませんから、気持ちを伝えられないイライラが、大声で泣く、逆に黙り込んでしまうといった姿になることもあります。

赤ちゃんの時には、泣き声や表情など、言葉以外のさまざまなサインで子どもの気持ちを察するかかわりができたのに、言葉のやりとりに頼り過ぎると、子どもの本当の気持ちと向き合えなくなってしまうことがあります。

自我も個性もしっかり出て、自分でできることも増え、お友だちとの交流も盛んになって、いろいろなことに心を動かし、さまざまな感情を味わう時期なのです。根気よく子どもの気持ちに向き合いましょう。やさしく声をかけ、抱きとめたり、一緒に遊んだり、心ゆくまでかかわることで、子どもは自分のどんな感情も受け入れてもらえた安心感で、自立への道を自然に自分の足で歩み始めます。

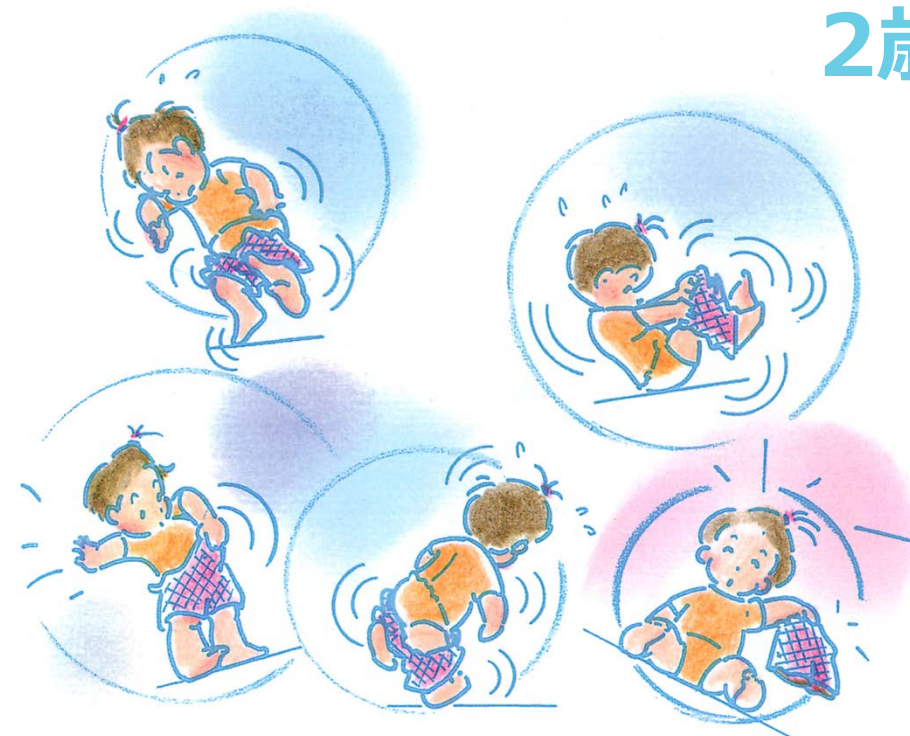
ひとり遊びから仲間へ

—— 自分の気持ち、相手の気持ちを感じる ——

体力もつき、言葉もたくさん話せるようになってくると、ひとり遊びから集団遊びへ変わっていきます。やがて子どもは自分の気持ち以外に、友だちにも自分と違う気持ちがあることに気が始めます。例えば、オモチャの取り合いになって、友だちを泣かせて譲ってもらったとしても、悔しくて泣いている友だちを見ていると、後味がすっきりしない……こういった経験をすることがあります。自分ひとりの都合だけでは物事は進まず、自分のわがままを我慢することや、他の人の気持ちを受け入れる大切さも次第に学んでいきます。

毎日の生活の中で周りの人とかわることによって、新しいかわり方や、人にはさまざまな反応があることを学んでいきます。そのかわりの多様性が子どもの世界を広げていくのです。たくさんの人とのかわりを、積極的に経験できる場や機会が大切です。

このような社会性の芽は、子どもの中の「自分」を大切にする「自立心」の芽でもあります。子どもの心の中に「自分は愛されている」という確かな基盤がなければ、「自立心」は育ちません。その基盤がしっかりできると、そこから、他の友だちの気持ちに共感したり、相手を受け入れたりするという思いやりの気持ちが生まれてきます。



達成感が自信を育む

—— 挑戦する姿を見守る ——

「やる気」を育てるためには、まずいろいろな経験ができるようにすることが必要です。お母さん、お父さんの仕事を一緒にやりたがることもあります。何でも子どもが興味を示したら、それが危険なことでない限り、できるだけ子どもにやらせてあげましょう。子どもにとっては、その達成感や、お母さん、お父さんの役に立ったという満足感が自信になり、ひとつのことを根気よく続ける習慣も身につきます。

これは体を動かすことについても同じことが言えます。体力がしっかりついてくるので、長い距離も歩けるようになってきます。そういった子どものがんばりを、心から「よくがんばったね」とほめてあげることで、「自分もやればできる」と思える子どもに育っていきます。

子どもにとって親は、自分の気持ちに答えてくれる人、いざという時は助けてくれる人という安心感が生まれ、その安心感を基盤に、自分から自信をもって、外の世界へ歩いていけるようになっていくのです。

「科学する心」を見つけようフォトコンテスト

大切にしたい子どもたちの姿
この中からたくさん見つけてみませんか

感動し想像する心



動植物に親しみ、命を大切にする心



人・もの・こととのかかわりを大切にして、思いやる心

遊び、学び、共に生きる喜びを味わう心



好奇心や考える心



自然に親しみ驚き感動する心



表現し、やりとげる心



科学する心を育てる

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

日々の暮らしの中で、子どもたち自ら、心を動かし、思いを表わしたり、生き生きと遊んだりする姿。

- すごい！ふしぎ！と身の回りの出来事に驚き、感動し、想像する心
- 自然に親しみ、自然の不思議さや美しさに驚き、感動する心
- 動植物に親しみ、様々な命の大切さに気付き、命と共生し、人や自然を大切にする心
- 暮らしの中で人、もの、出来事と意欲的にかかわり、ものを大切にする心、感謝する心や思いやりの心
- 遊び、学び、共に生きる喜びを味わう心
- 好奇心や考える心、その心の動きから生まれる創造性や分かった時の喜びを味わう心
- 自分の思いや考えを表現し、考え・つくり出していく楽しさの体験や、やり遂げる心

財団の理念

ソニー教育財団の願いは、
子どもたちが、自然から学び、他の人を思いやり、
愛する心と豊かな感性を身につけ、
そして、夢をもち、未来を切り拓く人に育つことです。
私たちは、こうした願いを実現するために、
科学を通して、好奇心や創造力を伸ばし、
勇気をもって新しいことに挑戦していく
子どもたちを育てることに
情熱をもって取り組む人たちと学びの場を支援します。

ソニーの幼児教育への取り組み



ソニー（株）のファウンダーである井深大は乳幼児期の教育の大切さを伝えるために「幼児開発協会」を1969年に設立。「幼稚園では遅すぎる」（1971）、「あと半分の教育」（1985）などの著書や協会での活動を通し、次代を生きる子どもたち一人ひとりがもてる可能性を十分に伸ばして、物事をありのままに受け止め素直に判断し、そして行動する人に成長することを願いました。その考えを受け継いで2002年にスタートしたソニー幼児教育支援プログラムでは、「科学する心を育てる」をテーマに、子どもたちが人や自然・事物などとの様々な関わりを通して、思いやりの心、豊かな感性や、好奇心・創造性を育む取り組みを支援しています。